

## 大学入学共通テストの実施

第28回北海道大学-ソウル大学校ジョイントシンポジウムを開催  
産学・地域協働推進機構と台湾デザイン研究院等でMOUを締結



## ■ 全学ニュース

- 1 大学入学共通テストの実施
- 2 北海道大学一般選抜の志願状況
- 3 フロンティア入試Type I 最終合格者の発表
- 4 国際総合入試合格者の発表
- 5 北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）
- 8 「北海道Society5.0みらい創造ワークショップ」を開催
- 9 「DEMOLA HOKKAIDO 2025 3rd Batchファイナルデモンストレーション」を開催
- 10 産学・地域協働推進機構と台湾デザイン研究院等でMOUを締結
- 11 「国際雑談～Be the Global Chatter～」を開催
- 12 高校生向けアントレプレナーシップ教育プログラム「アントレまちなか留学 in 台湾」を実施
- 13 第28回北海道大学-ソウル大学校ジョイントシンポジウムを開催
- 23 「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ講師が講義、見学を実施
- 26 国際連携研究教育局（GI-CoRE）が令和7年度学内共有セミナーを開催



産学・地域協働推進機構と台湾デザイン研究院等でMOUを締結



第28回北海道大学-ソウル大学校ジョイントシンポジウムを開催

## ■ 部局ニュース

- 27 「社会体験ワークショップ」オープンコースウェアで公開～北海道大学、北洋銀行他による社会体験のための実践的授業～
- 28 第20回医学研究院連携研究センター研究成果発表会を開催
- 29 工学系部局で「こころの健康セミナー」を開催
- 30 GX未来社会デザイン実践プログラム（応用編）を北方生物圏フィールド科学センター雨龍研究林で開催
- 31 北方生物圏フィールド科学センター研究林から銘木市へ出品
- 32 公開セミナー「マリンスポーツとアドベンチャーツーリズム」を開催

## ■ 表敬訪問 33

## ■ 人事 34

- 34 新任教授紹介



国際連携研究教育局（GI-CoRE）が令和7年度学内共有セミナーを開催



工学系部局で「こころの健康セミナー」を開催



GX未来社会デザイン実践プログラム（応用編）を北方生物圏フィールド科学センター雨龍研究林で開催



公開セミナー「マリンスポーツとアドベンチャーツーリズム」を開催

表紙：大学入学共通テストの実施（関連記事1頁に記載）

裏表紙：キャンパス懐古⑩ スケート風景（1966年2月）

# ■ 全学ニュース

## 大学入学共通テストの実施

令和8年度大学入学共通テストが1月17日（土）及び18日（日）に全国一斉に実施されました。

本学においても、実施本部、総務部、試験場部、救急医療部、連絡部及び広報部を置き、延べ約1,200人の教職員の協力により、無事終了しました。

全国の志願者は前年度より1,066人増加し、496,237人でした。

本学が担当する試験場（水産学部試験場、藤女子大学試験場を含む）の志願者は前年度より15人少ない3,826人で、各試験場（会場）の受験状況は次のとおりです。

（学務部入試課）

### 令和8年度大学入学共通テスト受験状況

試験場（会場）名・志願者数	日 程		1日目										2日目							
	教 科		地理歴史、公民		国語		外国語【筆記】		英語【リスニング】		英語【リスニング】再開テスト		理科		数学①		数学②		情報	
	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数	受験者数	欠席者数
農学部会場	384	371	13	374	10	374	10	374	10			359	25	364	20	356	28	361	23	
人文・社会科学総合教育研究棟会場	523	335	188	444	79	465	58	455	68			427	96	415	108	324	199	322	201	
理学部会場	391	363	28	363	28	361	30	358	33			294	97	305	86	299	92	299	92	
工学部会場	468	449	19	451	17	453	15	451	17			449	19	451	17	449	19	450	18	
高等教育推進機構 A会場	470	446	24	450	20	455	15	453	17			450	20	450	20	446	24	440	30	
高等教育推進機構 B会場	472	402	70	410	62	409	63	409	63			404	68	408	64	398	74	394	78	
保健科学研院会場	355	124	231	248	107	257	98	245	110			132	223	172	183	113	242	103	252	
高等教育推進機構 N会場	5	3	2	4	1	4	1	4	1			4	1	4	1	4	1	4	1	
藤女子大学試験場	500	473	27	476	24	473	27	469	31			442	58	429	71	417	83	429	71	
札幌地区 小計	3,568	2,966	602	3,220	348	3,251	317	3,218	350			2,961	607	2,998	570	2,806	762	2,802	766	
		83.1%	16.9%	90.2%	9.8%	91.1%	8.9%	90.2%	9.8%			83.0%	17.0%	84.0%	16.0%	78.6%	21.4%	78.5%	21.5%	
北海道大学水産学部試験場	258	210	48	225	33	227	31	225	33			223	35	225	33	209	49	218	40	
合 計	3,826	3,176	650	3,445	381	3,478	348	3,443	383			3,184	642	3,223	603	3,015	811	3,020	806	
		83.0%	17.0%	90.0%	10.0%	90.9%	9.1%	90.0%	10.0%			83.2%	16.8%	84.2%	15.8%	78.8%	21.2%	78.9%	21.1%	

※欠席者には当該教科を「受験しない」と申請し登録していない者も含まれる



受験風景

# 北海道大学一般選抜の志願状況

令和8年度の本学一般選抜の志願者は、前期日程5,442名、後期日程3,857名、合計9,299名で、昨年度と比較すると107名減少し、倍率は3.9倍です。

入学試験日は、前期日程が2月25日（水）・26日（木）、後期日程が3月12日（木）となっています。

各学部・学科等の志願者数は、次のとおりです。

(学務部入試課)

令和8年度北海道大学一般選抜志願者数

日程	学部・学科等	募集人員	志願者数	倍率	第1段階選抜 予告倍率	前年度 志願者数	前年度 倍率	総合型選抜 の欠員	変更後の 募集人員	変更後の 倍率								
前期日程	総合入試 理系	文系	95	391	4.1	4.0	344	3.6										
		数学重点選抜群	133	542	4.1	4.0	509	3.8										
		物理重点選抜群	239	651	2.7	4.0	618	2.6										
		化学重点選抜群	240	635	2.6	4.0	580	2.4										
		生物重点選抜群	169	407	2.4	4.0	413	2.4										
		総合科学選抜群	253	566	2.2	4.0	536	2.1										
		計	1,034	2,801	2.7		2,656	2.6										
	学部別入試	文学部	118	312	2.6	4.0	371	3.1										
		教育学部	20	52	2.6	4.0	47	2.4										
		法学部	140	431	3.1	4.0	304	2.2										
		経済学部	140	331	2.4	4.0	341	2.4										
		医学科	医学科	85	229	2.7	3.5	298				3.5	2	87	2.6			
			保健学科	看護学専攻	60	120	2.0	5.0				103	1.7	5	65	1.8		
				放射線技術科学専攻	28	71	2.5	5.0				67	2.4	5	33	2.2		
				検査技術科学専攻	30	107	3.6	5.0				75	3.0					
				理学療法科学専攻	13	40	3.1	5.0				52	4.0	2	15	2.7		
				作業療法科学専攻	14	47	3.4	5.0				34	3.4	2	16	2.9		
				小計	145	385	2.7					331	2.4	14	159	2.4		
		計	230	614	2.7		629	2.8				16	246	2.5				
		歯学部	38	124	3.3	6.0	154	4.1				2	40	3.1				
獣医学部	20	100	5.0	6.0	90	4.5												
水産学部	105	286	2.7	4.0	312	3.0				7	112	2.6						
合計	1,940	5,442	2.8		5,248	2.7	25	1,965	2.8									
後期日程	学部別入試 理学部	文学部	37	314	8.5	6.0	380	10.3										
		教育学部	10	163	16.3	10.0	79	7.9										
		法学部	40	404	10.1	6.0	430	10.8										
		経済学部	20	218	10.9	10.0	189	9.5										
		数学科	数学科	10	116	11.6	6.0	142				14.2						
			物理学科	3	79	26.3	6.0	99				33.0				4	7	11.3
			化学科	20	141	7.1	6.0	188				9.4						
			生物科学科 生物学専修分野	10	66	6.6	6.0	71				7.1						
			生物科学科 高分子機能学専修分野	2	14	7.0	6.0	19				9.5						
		地球惑星科学科	5	65	13.0	6.0	81	16.2										
	計	50	481	9.6		600	12.0	4	54	8.9								
	薬学部	24	263	11.0	6.0	382	15.9											
	工学部	応用理工系学科	29	251	8.7		241				8.3							
		情報エレクトロニクス学科	38	241	6.3		364				9.6							
		機械知能工学科	25	200	8.0		160				6.4							
		環境社会工学科	47	299	6.4		375				8.0	2	49	6.1				
	計	139	991	7.1		1,140	8.2	2	141	7.0								
農学部	53	471	8.9	6.0	451	8.5												
獣医学部	15	129	8.6	6.0	108	7.2												
水産学部	50	423	8.5	6.0	399	8.0												
合計	438	3,857	8.8		4,158	9.5				6	444	8.7						
総計	2,378	9,299	3.9		9,406	4.0	31	2,409	3.9									

注1: 「倍率」は、小数第2位を四捨五入。

注2: 「第1次段階選抜予告倍率」は、当初募集人員に対するもの。

# フロンティア入試Type I 最終合格者の発表

令和8年度フロンティア入試Type I の最終合格者発表が2月10日（火）に行われ、43名が合格しました。

(学務部入試課)

令和8年度フロンティア入試最終合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	志願者数	倍率	第2次選考合格者数	最終合格者数	
Type I	理学部地球惑星科学科	5	17 (0)	3.4	5 (0)	5 (0)	
	医学部 保健学科	医学科	5	10 (4)	2.0	5 (3)	3 (3)
		看護学専攻	7	5 (3)	0.7	2 (1)	2 (1)
		放射線技術科学専攻	7	6 (1)	0.9	5 (1)	2 (1)
		検査技術科学専攻	5	7 (3)	1.4	5 (2)	5 (2)
		理学療法学専攻	4	11 (6)	2.8	4 (1)	2 (0)
		作業療法学専攻	3	1 (0)	0.3	1 (0)	1 (0)
	歯学部	5	7 (0)	1.4	5 (0)	3 (0)	
	工学部	応用理工系学科 (応用マテリアル工学コース)	4	12 (4)	3.0	7 (3)	5 (1)
		環境社会工学科 (社会基盤学コース)	4	6 (1)	1.5	4 (0)	2 (0)
水産学部	20	45 (5)	2.3	20 (4)	13 (1)		
小計		69	127 (27)	1.8	63 (15)	43 (9)	
Type II	理学部	数学科	13	49 (21)	3.8	14 (3)	14 (3)
		物理学科	14	19 (7)	1.4	10 (3)	10 (3)
		化学科	11	29 (9)	2.6	11 (4)	11 (4)
		生物科学科 (高分子機能学専修分野)	3	9 (3)	3.0	3 (1)	3 (1)
	工学部	応用理工系学科 (応用物理工学コース)	15	40 (15)	2.7	15 (7)	15 (7)
		機械知能工学科	5	21 (6)	4.2	5 (2)	5 (2)
		環境社会工学科 (環境工学コース)	5	23 (7)	4.6	5 (1)	5 (1)
小計		66	190 (68)	2.9	63 (21)	63 (21)	
計		135	317 (95)	2.3	126 (36)	106 (30)	

※ ( ) 内の数字は、道内高校出身者で内数。

# 国際総合入試合格者の発表

令和8年度国際総合入試のうち、条件付合格者（国際バカロレア資格の取得を条件として合格していた者）の最終合格発表が2月10日（火）に行われ、15名が最終合格者となりました。

（学務部入試課）

令和8年度国際総合入試合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	志願者数	倍率	合格者数 (条件付合格者含む)	最終合格者数
総合入試	文系	5	23 (17)	4.6	5 (4) [ 5 (4) ]	5 (4)
	理系	10	33 (17)	3.3	10 (4) [10 (4) ]	10 (4)
計		15	56 (34)	3.7	15 (8) [15 (8) ]	15 (8)

※ ( ) 内の数字は、女子で内数。  
 ※ [ ] 内の数字は、条件付合格者数で内数。

# 北海道大学創基150周年記念募金（北大フロンティア基金）

北海道大学は、創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に北大フロンティア基金を創設しました。

奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、息の長い募金活動をする事としています。

2026年、北海道大学は創基150周年を迎えます。次の150年を見据えた記念事業のため、2023～2026年度の4年間、北大フロンティア基金は「創基150周年記念募金」として、皆様からのご寄附を募集しております。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金創設時累計	(12月31日現在) / 58,993件	10,711,347,629円
うち、北海道大学創基150周年記念募金累計	(12月31日現在) / 21,945件	4,546,579,072円

## <ご寄附状況>

12月は1,053件639,031,021円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいている方々のご芳名を掲載させていただきます（五十音別・敬称略）。

## 寄附者ご芳名（法人等）

株式会社アルファ技研、一般社団法人医療基盤研究所、医療法人おくがわ小児クリニック、一般財団法人協済会、俱知安町社会福祉協議会、株式会社サンゲツ北海道支社、医療法人サンモール歯科、株式会社敷島屋、市立千歳市民病院、医療法人スワンアイクリニック、株式会社ターフテック、ダイハツ北海道販売株式会社、東洋建設工機株式会社、フィード・ワン株式会社、北大医学部獅子の会（44期）、北海道大学宮城県同窓会、特定非営利活動法人三笠森水遊学舎、医療法人ミヤシタ、株式会社吉本組

## 寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	相澤佐保里	青井 良平	青木 俊介	青柳 武史	浅井 孝徳	安里 誠	浅沼 佳南
東 瑛太	東 陸	渥美 達也	阿部 柊生	安部 崇重	阿部 雅史	阿部 正広	網島 優
池田 順子	伊古田俊夫	石井 哲夫	石田 晃一	石津 明洋	石塚 匠	石野 悟司	伊藤 雄三
伊藤ゆかり	井戸川静夫	乾 澄明	犬飼 寿子	井上 猛	井上 晴喜	井上 将希	井原 博
今井 四郎	今井 晋	入澤 秀次	岩波真咲樹	内山 幸子	宇仁 義和	梅本 由佳	枝 朋彦
縁記 和也	遠藤 公憲	大澤 彰宏	大島 稔彦	大原 正範	岡 美樹	岡田 英子	小川 弘記
沖崎 遼	小熊 豊	尾崎 公哉	小田原一史	小野 静香	小原 孝文	小原 大和	笠井 慎也
重昆 達也	金川 聖也	金川 眞行	金澤 勝幸	河井 康孝	河谷真知子	河村 愛	河本 充司
岸本 茂	岸本 教代	北井 秀典	北川 武史	北河 徳彦	北林 陽子	鬼頭 幸子	衣川 暢子
木村 成二	桐越千恵美	久々湊 聖	日下 大器	久保 英二	熊谷圭之輔	熊澤 哲	栗原 誠治
黒木 俊宏	黒澤 努	黒須 成弘	小池 智	上月 浩	郡山 智行	小関 成樹	後藤 雅弘
小丹枝利昭	木幡 行宏	小濱 好彦	小林 賢人	小林 次郎	駒井 孝博	近藤健一郎	才木みゆき
齊藤 晋	齊藤 利治	齋藤 久	佐伯 宏樹	坂口 新樹	坂口 環	坂本 樹則	坂本 大介
崎浜 秀康	崎元 大志	佐々木一夫	佐藤 公望	佐藤壮一郎	佐藤 聡真	佐藤 久美	澤 洋文
沢渡 隆範	三升畑元基	三分一博基	志済 聡子	七戸 俊明	柴田 麻里	柴田 祐次	清水 研一
庄司周一郎	白尾 誠二	菅原 新也	杉江 和男	杉澤 秀子	杉元 紘一	杉山 隆文	鈴木 貴之
鈴木 祐人	鈴木 充	須田 昌夫	須藤 和昌	関根 君恵	瀬名波栄潤	曾村 尚明	大丸 成一
高木 忍	高木 淳子	高島 郁夫	高瀬登志彦	田栗 和奈	武田 薫子	竹田 剛	田中 利男
千葉 滋	對馬 新	土家 琢磨	椿 茂	坪根 克朗	鶴田 敏郎	土井 憲	戸松 幹晴
豊田 威信	永井 利明	中川 敦夫	中島 祐	中島 千絵	中埜渡文嘉	中町 昭道	中村 和正

成田 吉明	成瀬 早紀	西田 和代	西村 龍一	根本 叔治	野川 哲義	野田扇三郎	野村 修一
花田 秀一	馬場 顕介	林 昌宏	林寺 正俊	原 啓介	原田 祐司	半崎 貴敏	坂東 実子
日裏 孝弘	日尾野隆大	飛驒 一利	平澤 雅子	廣重 勝彦	福岡 淳	福富 京	福永 悟郎
福永 悠希	福原 俊一	藤井 治也	藤川 利夫	藤澤 裕子	藤田 禎三	細井 保宏	堀川 猛
槇口 宏司	松井 耕二	松尾 泰世	松尾 裕介	松澤 重治	松原 謙一	丸尾 素子	三浦 京子
三木 證永	峰久 次郎	宮田 信幸	宮本 謙介	村 政幸	村上 広輝	村上 保之	村瀬徳啓充
森田 好博	守屋 仁彦	山内 咲人	山口 則之	山口 光	山崎 初男	山田 哲	山田 真治
山本 晶	山本 惇	山本 芳輝	余湖 兼右	横井 淳	横尾 英樹	横山 考	横山 春雄
吉田 香織	吉田 節子	吉田 知行	吉田 広志	吉津 達郎	米満 映	林 楷偉	渡辺 尚志
渡邊 祐介	渡邊由佳子						

<寄附者への特典>

創基150周年を記念した銘板

創基150周年を記念した銘板をご用意しました。銘板は、これまでのご寄附累計金額をもとに、本学総合博物館に掲出させていただきます。個人・法人共に、ご寄附の累計が1億円以上でプレミアムゴールド、1千万円以上でゴールド、500万円以上でシルバー、100万円以上でブロンズとなります。

既存のホワイト銘板は累計20万円以上が対象です（令和2年度以前は総合博物館、令和3年度以降は百年記念会館に掲出）。なお、銘板については、年度内に賜ったご寄附の累計を取りまとめ後、翌年度9月頃を目途に掲出いたします。

※このほか、ご寄附の金額に応じ、オリジナルグッズや感謝状の贈呈、御礼の場など様々な特典をご用意させていただきます（詳細はこちらでご確認ください <https://www.hokudai.ac.jp/fund/gratitude/>）。

<感謝状の贈呈>



株式会社ケアネット様（令和7年12月11日）



株式会社トーア様（令和7年12月16日）

<紺綬褒章の伝達>



吉田広志様（令和7年12月24日）

---

## ご寄附のお申し込み方法

---

北大フロンティア基金ホームページの「教職員からの寄附」にアクセスしてください。

<https://www.hokudai.ac.jp/fund/howto-staff/>

### ①給与口座からの引き落とし

ホームページから「北大フロンティア基金申込書（給与口座からの引落）」をダウンロードし、ご記入の上、卒業生・基金室 基金事務担当に提出してください。

### ②郵便局または銀行への振り込み

卒業生・基金室 基金事務担当にご連絡ください。払込取扱票をお送りします。

### ③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、卒業生・基金室 基金事務担当までご持参ください。

申込書は、ホームページから「北大フロンティア基金申込書（教職員現金用）」をダウンロードしてご記入いただくか、卒業生・基金室 基金事務担当にもご用意していますので、お越しただいてからご記入いただくことも可能です。

### ④クレジットカード決済・コンビニ決済・PayPayでのご寄附

北大フロンティア基金ホームページ

(<https://www.hokudai.ac.jp/cgi-bin/fund/bin/xRegist.cgi>) の寄附申し込みフォームから申込をお願いします。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 卒業生・基金室 基金事務担当（事務局・学内電話 2017）

# 「北海道Society5.0みらい創造ワークショップ」を開催

産学・地域協働推進機構スタートアップ創出本部は、SCSK北海道株式会社と協働で「北海道Society5.0みらい創造ワークショップ」を開催しました。2022年以降4回目の開催となった本プログラムは、アイデアソンからビジネスモデル構築、最終的な事業計画書の作成までを一気通貫で行う実践的な創業支援プログラムです。最先端のデジタル技術に関心を持つ個人及びチームに対し、自主的に知識や技術を習得できる環境を提供するとともに、北海道における起業機会創出の「はじめの一歩」を支援することを目的として

います。

10月11日（土）から始まった本プログラムは、12月20日（土）に最終成果発表会を実施し、計11チームがプレゼンテーションを行い、審査員による厳正な審査が行われました。審査の結果、「森づくりを、もっと賢く、もっと安全に。」をテーマに、ドローンやAIを活用した森林管理システムを提案したチーム「YAMAMORI」が最優秀賞に選出されました。続く優秀賞には、患者主体の医療データ活用を掲げたチーム「HelmMed」、特別賞には絵画修復関連事業を提案したチーム

「WA-Chain」がそれぞれ入賞しました。その他、女性向けヘルスケアアプリや、マイナースポーツ用品の越境リユースなど、多様な視点からの課題解決ビジネスが発表され、会場は次世代の起業家たちの熱気に包まれました。

産学・地域協働推進機構は、今後もこうした連携を通じて、研究成果やアイデアの社会実装を加速させ、北海道の未来を担うイノベーション創出に貢献してまいります。

（産学・地域協働推進機構）

## 実施内容

日程：2025年10月11日（土）～12月20日（土）（全8回）

場所：フード&メディカルイノベーション国際拠点（FMI）

参加者：60名

共催：北海道大学産学・地域協働推進機構、SCSK北海道株式会社

協力：公益財団法人とかち財団（LAND）

後援：STARTUP HOKKAIDO実行委員会、函館市、帯広市、北見市、長沼町、空知信用金庫



最優秀賞を獲得したチーム「YAMAMORI」



優秀賞を獲得したチーム「HelmMed」



特別賞を獲得したチーム「WA-Chain」

# 「DEMOLA HOKKAIDO 2025 3rd Batch ファイナルデモンストレーション」を開催

産学・地域協働推進機構スタートアップ創出本部は、11月29日（土）に「DEMOLA HOKKAIDO 2025 3rd Batch」の最終発表の場である「ファイナルデモンストレーション」を実施しました。DEMOLAはフィンランド発の産官学連携イノベーション創出プラットフォームであり、世界16か国、60大学以上が参加している国際的な企業課題解決ネットワークです。学生と企業担当者が一緒にチームを組み、企業のリアルな課題（ケース課題）解決に取り組むのが特徴です。2018年から日本では初めて本学が導入し、約8年間かけて47社53課題に取り組む活動を展開してきました。

今回は三河淡水魚株式会社にご参加

いただき、「New Standards for eels」をテーマに、日本の伝統的食材である「うなぎ」の生産者・消費者が納得する統一的な価値基準は何か、という課題が提示されました。

参加者は10月から約2ヶ月をかけて課題を解決するためのアイデアの創造に取り組み、当日はその集大成として、新たに考案したうなぎの等級制度やその付け方（評価方法）、そして等級制度を生産者・消費者双方に広め業界全体を発展させるためのアイデアについて学生チームから発表が行われました。

参加した学生からは「プログラムでは、うなぎの現場へ視察に行ったり、味覚の研究をしている機関にヒアリン

グに行ったりと、普段の講義では体験できないような学びがあった」「夜遅くまで議論し、大変なことも多かったけれど、最後までやり切ることができてよかった」といった感想が寄せられました。また三河淡水魚株式会社の担当者からは「学生たちのアイデアの完成度に驚いた。実際にやっていくためには、どこからやっていくべきか検討したい。最終提案書も期待している」といった声がありました。

産学・地域協働推進機構は、今後もアントレプレナーシップ教育を通じて、地域の将来を担う人材の育成に貢献してまいります。

（産学・地域協働推進機構）

## 実施内容

日 程：2025年11月29日（土）（DEMOLA HOKKAIDO 2025 3rd Batchの期間：10月11日（土）～11月29日（土））  
 会 場：フード&メディカルイノベーション国際拠点（FMI）  
 主 催：産学・地域協働推進機構  
 参加企業：三河淡水魚株式会社  
 対 象：大学生・大学院生7名



発表の様子



質疑応答の様子



集合写真

## 産学・地域協働推進機構と台湾デザイン研究院等でMOUを締結

12月5日（金）、国際デザイン学会連合国際会議「IASDR (The International Association of Societies of Design Research)」の2025年年次会議（以下「IASDR2025」という。）の開催に合わせ、産学・地域協働推進機構は、台湾デザイン研究院をはじめとする国際的なデザイン関連機関と、包括的な連携に関するMemorandum of Understanding (MOU) を締結しました。同日には調印式が行われ、今後の国際連携に向けた協力関係を正式に確認しました。

本MOUは、IASDR2025を通じて構築されたネットワークを基盤とし、国境を越えたデザイン分野での継続的な対話と協働を促進することを目的としています。具体的には、デザインに関する情報・研究成果の共有、人的・組織的ネットワークの形成、国際共同プロジェクトやクロスボーダーな取組への参画、さらにはデザインアワードの相互発信など、多様な協力の可能性が盛り込まれています。今回のMOUには、台湾デザイン研究院のほか、アジア及び欧州のデザイン教育・研究・実

務を担う機関が参画しています。

今後は本MOUを起点として、より具体的な分野やテーマに応じた個別連携の検討も予定しています。産学・地域協働推進機構では、本学の教育・研究資源と国際的なデザインネットワークを結び付けることで、デザインを起点とした社会課題解決や地域・産業の発展に貢献する人材育成を目指してまいります。

（産学・地域協働推進機構）



IASDR2025会場



調印式の様子

## 「国際雑談～Be the Global Chatter～」を開催

産学・地域協働推進機構スタートアップ創出本部は、学生団体A.R.N.及び本学学生がCEOを務めるBeeber Globalと協働して「国際雑談～Be the Global Chatter～」を開催し、札幌市内の高校生と本学の留学生を中心に36名が参加しました。

本イベントは、高校生と本学の留学生が英語を用いて交流することにより、異文化理解や英語コミュニケーション能力の向上を促すとともに、協調性や表現力、対話力といったアントレプレナーシップを育むことを目的としています。

企画・運営を担当した学生団体A.R.N.は、令和5年度に文部科学省のEDGE-PRIME Initiative事業の支援のもとで開催したアントレプレナーシップ教育

プログラム「アントレまちなか留学」に参加した高校生で構成され、「国際雑談～Be the Global Chatter～」は、彼らがプログラム内で考案したアイデアを実現したものです。令和6年3月に初開催した後も北大祭や北大サイエンスフェスタといったイベントの中で開催を重ね、今回で8回目となりました。

イベントには、参加者が自然と英語を使えるアイスブレイクを取り入れたりと、会話のきっかけとして活用できる話題カードを用意したりするなど、国際交流のハードルを下げて気軽に参加できるよう、高校生ならではの目線で随所に工夫が施されています。また、今回から留学生のお気に入りの文化を紹介する「異文化交流ピッチ」や、運営側の課題や活動経験を伝える企画を

設け、より一層アントレプレナーシップを体感できるイベントとなりました。

参加した高校生からは「初めて会う人と交流することでコミュニケーション力が上がり、英語に対する考え方が少し変わった」「異文化交流ピッチは、実践もできて学びの多い時間になった」といった感想が寄せられました。留学生からも「英語で文化交流できることは大変興味深い。高校生とも話すことができるとてもよかった」などの声が寄せられ、大変好評でした。

産学・地域協働推進機構は、今後もアントレプレナーシップ教育を通じて、将来を担う人材の育成に貢献してまいります。

(産学・地域協働推進機構)

### 実施内容

日時：2025年12月27日（土）13:00～16:00

参加者：36名（高校生26名、留学生10名）

会場：Deep Tech CORE SAPPORO



会場の様子



異文化交流ピッチの様子



交流中の様子



集合写真

# 高校生向けアントレプレナーシップ教育プログラム 「アントレまちなか留学 in 台湾」を実施

1月8日（木）～11日（日）に、台湾を舞台に「アントレまちなか留学」を実施しました。道内の高校生19名、サポーターとして本学の大学院生4名及び大学生1名が参加し、現地のホームステイ先を拠点に、都市のまちなかをフィールドとした実践的なアントレプレナーシップ教育プログラムに取り組みました。

プログラム期間中、高校生はホストファミリー宅に滞在し、英語での交流を通じて現地の文化を学びました。

2日目のプログラムでは、台湾の歴史ある商業エリアである迪化街を散策し、その成り立ちや現在のビジネスの

工夫を観察しました。続いて、アップサイクルファッションを展開する施設「House of Story wear」を訪問し、サステナブルな事業づくりについて学びました。午後には、「台湾デザイン研究院」及び「Taiwan Tech Arena」を訪れ、台湾のスタートアップ政策や日台連携の最前線を学びました。

3日目には、アントレプレナーシップワークショップ、華山1914文化創意産業園区にて英語でミッションに取り組む「まちなかENGLISH QUEST」に挑戦し、地域の魅力や課題を自ら発見して発信する力を養いました。プログラムの締めくくりとしてホストファミリ

ーとのフェアウェルセレモニーを行い、短期間ながらも濃密な学びを振り返りました。

本プログラムでは、高校生が主体的に考え、行動し、対話する経験を積むと同時に、大学生・大学院生が学習支援やファシリテーションを担うことで、世代を超えた学びの循環が生まれました。まちなか全体を教室とする本取組は、国際的な視点からアントレプレナーシップを育む実践例として、大きな教育的価値を持つものとなりました。

（産学・地域協働推進機構）

## 実施内容

日 程：2026年1月8日（木）～1月11日（日）

場 所：迪化街、House of Story wear、台湾デザイン研究院、Taiwan Tech Arena、ELFRED Venue E、華山1914文化創意産業園区

対 象：高校生19名、大学生1名、大学院生4名

運 営：Hello World株式会社



ホストファミリーの皆さんと



台湾デザイン研究院



まちなかENGLISH QUEST



集合写真

## 第28回北海道大学-ソウル大学校ジョイントシンポジウムを開催

本学の戦略的国際連携先である韓国ソウル大学校（以下「SNU」という。）との第28回ジョイントシンポジウムが、11月5日（水）・6日（木）の2日間、札幌キャンパスで開催されました。SNUと北海道大学によるジョイントシンポジウムは、初回開催の1998年以来、毎年札幌とソウルで交互に開催しており、今年で28回目を迎えました。

一般のシンポジウムは「学術イノベーションと社会への参画－社会及び産業との連携による研究・教育の推進－」をテーマとし、同シンポジウムに付随して開催された研究分科会の研究分野は、「法学」「農学」「工学」「医学」「獣医学」「情報科学」「環境健康科学」「教育学」「スラブ・ユーラシア研究」と多岐にわたり、学術イノベーションと社会への参画に向け

た研究の推進に関する可能性が示唆されたものとなりました。

シンポジウムの全体会では、テーマ「学術イノベーションと社会への参画」に沿う形で、北大グリーントランスフォーメーション（GX）先導研究センター副センター長の村越 敬教授が基調講演を行い、昨年創設された同センターの紹介のほか、今後、GX研究の卓越性を高め、社会実装に向けた取組を加速していく旨発表を行う一方、GX研究の研究事例として、同センターに所属する伊藤貴則助教が、土壌への炭素貯留効果のあるバイオ炭の活用が気候変動の緩和に資するとし、その有用性に関する発表を行いました。

同シンポジウムの開催中、両校執行部が会合を開催し、SNUで来年開催予定の第29回ジョイントシンポジウムに

関する調整が行われたほか、SNUの執行部職員が北海道ワイン教育研究センター及び総合博物館を視察しました。

同シンポジウムの翌々週には、両校の事務職員を相互派遣する職員交流も実施され、本学の社会共創部広報課職員1名をSNUへ派遣する一方、SNUの企画調整部職員2名を本学に受け入れ、互いの職場への訪問を通じて、広報・コミュニケーション業務に関して苦労している点や工夫している点について意見交換を行い、相互に交流を深めました。

29回目のジョイントシンポジウムは、2026年9月から11月にかけてソウルで開催予定です。

（国際連携推進本部）



開会の挨拶を述べる北大 高橋 彩理事・副学長（国際担当）



祝辞を述べるSNU キム・テギョン国際担当副学長



シンポジウム全体会への参加関係者

## 分科会1

## Work and Law in the age of AI and Digitalization - comparative research of Japan and Korea

AIとデジタル時代の労働と法—日韓両国における社会の変化と規制の対応／法学研究科 教授 池田 悠

本分科会では、「AIとデジタル時代の労働と法—日韓両国における社会の変化と規制の対応」を統一テーマとして、AIやデジタル化の進展によって変容を迫られている日韓両国の伝統的な労働法制に着目し、ソウル大学校法科大学院の崔 碩桓副教授とともに、北海道大学・ソウル大学校双方の大学院生による個別報告7編を交えつつ、4時間に及ぶ英語での分科会を開催しました。

まず、開催校である北海道大学を代表して法学研究科の池田 悠教授から開会の挨拶を行い、本分科会の趣旨と当日のタイムスケジュールを全参加者と共有しました。そして、日本側1人目のスピーカーとして法学研究科博士後期課程3年の荒澤喜寛氏が登壇し、「Criminal Penalties under Individual Labor Relations Law : A Comparative Study of Japanese and French Labor Criminal Law」という題目にて報告及び質疑を行いました。続いて、韓国側1人目のスピーカーとしてソウル大学校のキム・イェジン氏が登壇し、

「Artificial Intelligence, Digitalization, and the Future of Labor Law: The Case of Korea」という題目にて報告及び質疑を行いました。次に、日本側2人目のスピーカーとして法学研究科博士後期課程2年の柏木彩奈氏が登壇し、「Employment Security for people with Disabilities: Focusing on Employment Consideration」という題目にて報告及び質疑を行いました。続いて、韓国側2人目のスピーカーとしてソウル大学校のチョン・ヒョンウ氏が登壇し、「How to Protect Platform Workers: The Cases of the United States and South Korea」という題目にて報告及び質疑を行いました。次に、日本側3人目のスピーカーとして法学研究科博士後期課程2年の朱 竝宇氏が登壇し、「Reconstructing the Pursuit of Duty to Care for Safety Liability in Taiwan: Focusing on a Comparative Study with Japan」という題目にて報告及び質疑を行いました。続いて、韓国側3人目のスピーカーとしてソウル大学校のシン・ユジュン氏が登壇し、「Digitalization

and the Expansion of Labor Law」という題目にて報告及び質疑を行いました。次に、日本側4人目のスピーカーとして法学研究科修士課程1年の服部 斗満氏が登壇し、「Non-Payment or Reduction of Retirement Benefits」という題目にて報告及び質疑を行いました。最後に、共同開催者であるソウル大学校を代表してソウル大学校の崔副教授から、当日の大学院生からの個別報告を本分科会の趣旨との関係から総括し、継続的な交流を約束しつつ、閉会の挨拶を行い本分科会は終了しました。

その後、北海道大学主催の全体会及びレセプションパーティに報告者全員で参加し、他分科会における開催内容や交流の好事例を把握するとともに、今後の両校間での交流の発展に関して参加者間で意見交換し、次年以降も両校間で継続的な交流を継続することを確認しました。

(法学研究科)

分科会2

# Strategies for Forest Protection and Wildlife Management in the Era of Climate Change

気候変動時代の森林保護と野生動物の生息地管理戦略／農学研究院 教授 宮本敏澄

農学部森林科学科とソウル大学校農業生命科学大学山林科学部は「気候変動時代の森林保護と野生動物の生息地管理戦略」をテーマに、サテライト分科会を開催しました。本セッションは、地球温暖化による森林生態系の変容と生物多様性の危機を背景に、森林保護・野生動物の生息地管理・流域生態系の保全を統合した学术交流と政策方向性の提示を目的として企画されました。

当日は両校から計70名以上が参加しました（北海道大学 研究者10名、大学院生21名、学部学生他15名／ソウル大学校 研究者2名、大学院生6名）。招待講演・若手研究発表・Q&A・フィールド討議を含む全10件の発表が行われ、

病害虫、土壌温暖化、生態遺伝、哺乳類・昆虫・ダニ媒介宿主、緑化回復後の生息地利用などの多角的成果が共有されました。会場では気候変動に対する森林機能低下（炭素固定・水循環調整・地域生計基盤）の懸念、分野横断型アプローチの必要性、科学・政策・コミュニティ参画連携の重要性が強調されました。

2日目午前には北方生物圏フィールド科学センター 苫小牧研究林へ移動し、森林博物館・鳥類標本・哺乳類剥製・樹冠観測塔（キャノピータワー）見学と討論を実施しました。現地講義では、研究林における保全施策と生態観察（林冠構造、野生動物の生息状況、環境ストレス応答の可視化）が行

われ、大学院生・若手発表者らが実証フィールドからの知見創出と協働教育の可能性について議論しました。

今後の両校交流は本年6～8月に合同森林実習として、天塩・中川研究林及び南部学術林での共同開催を計画し、また日本学術振興会の二国間交流事業への共同研究申請を予定しています。研究共著・地域ネットワーク形成・フィールド教育連携を通じて、東アジアにおける寒冷域森林と野生動物保全の知の共樹冠観測塔創基盤を強化していく所存です。

（農学研究院）

## HU-SNU JOINT SYMPOSIUM 2025

### SATELLITE SESSION ON FOREST ECOLOGY & WILDLIFE SCIENCE



NOVEMBER 5-6, 2025  
HOKKAIDO UNIVERSITY,  
SAPPORO, JAPAN

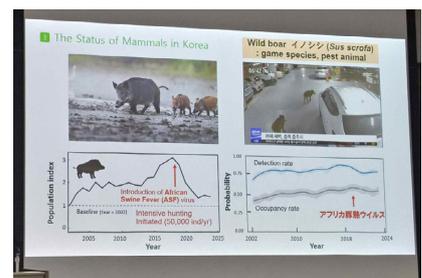
Exploring forests, wildlife,  
and collaboration between  
Japan and Korea



分科会プログラム



樹冠観測塔



ソウル大学校による研究発表

## 分科会3

## Innovations of Nuclear Energy and Radiation Technology for a Sustainable Society

持続的な社会に向けた原子力と放射線技術のイノベーション／工学研究院 准教授 河口宗道

研究分科会「持続的な社会に向けた原子力と放射線技術のイノベーション」を開催しました。本分科会は、地球温暖化対策やエネルギー安全保障の確保といった現代社会が直面する重要課題に対し、原子力及び放射線技術に係る革新技術から幅広い応用の可能性を議論することを目的としたものです。特に、脱炭素社会の実現に向けた安全な原子力利用、医療・産業分野における放射線応用の高度化、さらには新たな材料・シミュレーション技術など、持続可能な社会につながる研究を総合的に俯瞰する機会として位置づけられました。また、両大学の将来的な研究協力を見据えて、若手研究者の交流促進を図ることも重要な狙いとしています。

工学研究院応用量子科学部門からは千葉 豪教授をはじめ、教授4名、准教授2名、助教2名、大学院生2名が参加し

ました。ソウル大学からはキム・ウンス教授を中心に、教授2名、ポスドク2名、大学院生9名が参加し、2日間で両大学から合計21件の最新の研究成果が発表されました。発表テーマは「原子力・放射線教育」「原子力システム安全」「放射線利用」「材料科学」「高度シミュレーション技術」など多岐にわたり、各大学の強みが明確に示されました。発表後には活発な質疑が行われ、研究手法の比較や共同研究の可能性について具体的な議論が交わされました。

特に印象的であったのは、両大学の若手研究者及び大学院生による率直かつ意欲的な議論です。20～30代の参加者が中心となり、自身の研究内容だけでなく、相手大学の研究内容に関する建設的な意見を積極的に提案しました。その結果、分科会全体の雰囲気は活気が生まれ、若手同士が学術的刺激

を受ける場になりました。両大学が「原子力と放射線技術のイノベーションが持続可能な社会の実現に貢献する」という共通認識を持っていることも再確認され、今後の若手研究者の連携深化に向けた基盤が新しく形成されました。将来的な共同研究へと発展し、大きな成果につながることを期待されます。

本分科会の議論を通して、研究課題の共通点や互いの強みを整理できたことは、今後の国際共同研究に向けた具体的な方向性を検討する契機となりました。これらの成果を踏まえ、両大学間の研究協力が一層強化され、原子力と放射線技術のイノベーションに向けた新たな取り組みへとつながることが期待されます。

(工学研究院)

## 分科会4

## One Health Approaches to Control Infectious Diseases

One Healthアプローチ：感染症制圧へ向けて／獣医学研究院 教授 迫田義博

獣医学部において「One Healthアプローチ：感染症制圧へ向けて」をテーマとする獣医学分科会を開催しました。本分科会は、本年より人の健康・動物の健康・環境の健康はすべてつながっているというOne Healthの概念を推進するために企画されました。本年は、鳥インフルエンザなど「感染症制御」に関する国際的な課題に対し、学際的な視点から議論を深めることを目的としました。

初日は開会式に続き、6件の研究発表が行われました。ソウル大学校側からは、カンソク・チョイ教授による「韓国における高病原性鳥インフルエンザ対策」、ダエサブ・ソン教授による「犬インフルエンザウイルスの過去・現在・未来」、ジョンウ・リム博士による「感染症に対するナノ工学的ワクチン・診断システム」が報告さ

れました。日本側からは、池中良徳教授が「One Health リサーチセンターの取り組み」、日尾野隆大准教授が「HOT-WIRE：野生動物事案対応チームの活動」、直 亨則特任講師が「学術機関における先端診断と教育の連携」を紹介しました。いずれもヒト・動物・環境の健康を統合的に捉えるOne Healthの理念に基づき、最新の研究成果と実践事例を共有する内容でした。最後にこれまでの両大学の友好関係をよく知るハンサン・ユ教授から今回の成果と今後の展望について提言が示されました。質疑応答では、鳥インフルエンザの国際的監視体制や、診断技術の標準化、野生動物における感染症リスク評価など、今後の協力の方向性について活発な議論が交わされました。午後には人獣共通感染症国際共同研究所の視察と全体会議への参加を行い、

交流をさらに深めました。

2日目は、次年度以降の活動計画を協議しました。具体的には、動物に関わる法律問題を獣医学の知識を使って解決する学問分野である「法獣医学」をテーマとして、One Healthの実践を進めることとしました。この中では、若手研究者の交流促進、共同研究テーマの設定、国際機関との連携強化を柱としました。

本分科会は、感染症制御に関する知見を共有し、学際的ネットワークを強化する貴重な機会となりました。今後も、One Health教育と研究の国際的推進に寄与するため、ヒト・動物・環境の健全性を守るための国際協力を一層推進してまいります。

(獣医学研究院)



これまでの交流の経緯や今後の活動を提案されるソウル大学校 ユ教授



シンポジウム開催後の参加者による集合写真

## 分科会5

## Care and Empathy: Academic Research and Its Social Dissemination in the Context of the Slavic-Eurasian Region

ケアと共感——スラブ・ユーラシア地域における学知と社会発信／スラブ・ユーラシア研究センター 准教授 安達大輔

スラブ・ユーラシア研究センター（以下「SRC」という。）は、11月3日（月・祝）にジョイントシンポジウムの分科会をSRC大会議室において開催しました。この分科会はソウル大学校ロシア・東欧・ユーラシア研究所（以下「IREEES」という。）との共催により実施されました。日韓両国におけるスラブ研究の中核を担う両研究所はこれまで継続的に交流を重ねてきており、ジョイントシンポジウムの枠内で分科会を開催するのは今回で11回目となります。

現在SRCでは、これまで蓄積してきたスラブ・ユーラシア地域研究の知見を基盤として、急激に変動する世界秩序の中での生存戦略を探究する研究プロジェクト「国際的な生存戦略研究プラットフォームの構築」を進めています。一方IREEESでは、韓国における看護人材不足という社会的課題を背景に、「ケアの哲学」に関する人文知を理論的基盤とした基礎研究「ロシア語話者移民の看護師・医療従事者の養成

についての研究」を立ち上げました。本分科会では、当該分野で日韓を代表する研究機関によるこうした最新の研究プロジェクトの成果を生かし、ますます多極化し多様性を増す現代世界において、「ケア」や「共感」が果たすことのできる役割を多角的に検討しました。社会の分断、対立、不平等といった現代的課題に対して、社会・産業界との協働を通じた研究・教育の可能性を探りました。当日の報告では、ロシア・モンゴル・韓国におけるケアや共感の様々な実践が、戦争や革命、介護・看護、地域コミュニティ、記憶、ジェンダーなどの現代的な視点から取り上げられ、極めて充実した議論が行われました。合計23名の参加者の中で大学院生や日本学術振興会特別研究員ら若手研究者の報告も高い評価を受け、次世代へ研究のバトンをつなぐという意味でも意義深いものとなりました。このように分科会を通じて、「ケアと共感」というテーマの重要性と今日的意義、並びに日韓共同研究の有効

性が確認されました。今後は、両研究所の現在のプロジェクトを発展させる形で、オンラインを中心としたセミナーや研究打ち合わせを継続的に実施する予定です。またSRCでは、センターを拠点とする国際サマースクールを開催を計画しており、IREEESも潜在的な参加機関として想定しています。大学院生やポストドクレベルでの積極的な交流を通じて、将来的な国際共同研究の基盤形成を進めていく予定です。

（スラブ・ユーラシア研究センター）



分科会参加者の集合写真

分科会6

# Bridging Research, Education, and Implementation: Medical AI for Clinical Innovation and Societal Impact

研究・教育・実装の橋渡し：臨床革新と社会的インパクトを実現する医療AI／医学研究院 教授 工藤與亮

11月18日（火）、医学部百年記念館にて、医学系研究分科会を開催しました。医学研究院放射線科学分野画像診断学教室とソウル大学校医学部放射線医学教室主催の本研究分科会は、両大学の連携強化を目的として令和5年度に開始されました。札幌で初めての開催となった3回目である今回のイベントには、現地29名、オンライン29名の計58名が参加しました。

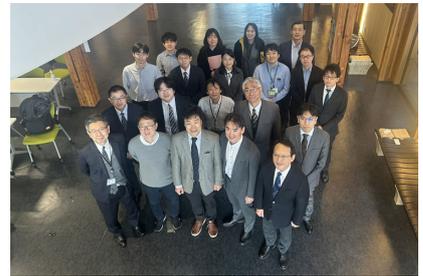
本年度は、最新研究の共有に加え、社会実装や人材育成の観点から議論を深めることを目的として「学術イノベーションと社会への参画－社会及び産業との連携による研究・教育の推進－」をテーマとし、MRI、核医学、医療AI実装、医療AI教育の4セッションを設けました。また、国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）に採択された新規医学系研究支援プログラムPRISM-HUの主任研究者もデイスカッサントとして参加し、学術と社会の接続を意識した討論が行われました。

MRIセッションでは、筋骨格系イメージング、神経疾患に関する新たなMRI指標、筋萎縮性側索硬化症（ALS）モ

デルを用いたグリーンパティック研究が報告され、両大学の強みを生かした共同研究の可能性が示されました。核医学セッションでは、PET画像の高解像度化、確率モデルを用いた画像解析、Tau PETの動向、セラノスティクス（Theranostics）の最新知見が共有されました。PRISM-HU研究者の参加により、科学的観点からの議論がさらに充実しました。医療AI実装セッションでは、歩行動画解析によるフレイル評価の多施設研究が紹介され、AI導入時の課題や展望について意見交換が行われました。医療AI教育セッションでは、本学の医療AI開発者養成プログラム（CLAP）や、核医学からAI研究へと進むキャリア形成事例が共有され、次世代育成の方向性について議論が深まりました。

今回の医学系研究分科会を通じ、北海道大学とソウル大学校の国際連携はさらに強化されました。今後は、共有された研究成果を基盤に共同研究の発展を図るとともに、教育・研究双方で持続的な交流を進めてまいります。

（医学研究院）



分科会参加者の集合写真



分科会ポスター

## 分科会7

## HU-SNU Joint Symposium on “Toward Next-Generation Thermal-Fluid and Energy Engineering”

次世代の熱流体・エネルギー工学に向けて／工学研究院 准教授 植村 豪

10月27日(月)・28日(火)に、「次世代の熱流体・エネルギー工学に向けて」と題し、機械・宇宙航空工学に関する分科会を開催しました。本分科会は、ソウル大学校側の代表としてド・ヒョンロク教授、北海道大学側代表として工学研究院の植村 豪准教授が中心となり、企画・運営されました。

本分科会では、教員による口頭発表として、ソウル大学校7件、北海道大学5件、さらに学生による発表として、ソウル大学校2件、北海道大学5件が行われました。開催形態は対面方式のみとしましたが、両大学から約30名が参加し、大変盛況な分科会となりました。

発表内容は、流体及び二相流現象、燃焼・推進、エネルギー変換・貯蔵技術、計測・可視化手法など、基礎研究から応用研究に至るまで幅広い分野にわたりました。2日間を通じて活発な議論と情報交換が行われ、参加者にとって今後の研究活動の連携や発展につながる有意義な機会となりました。また、1日目夜にはウェルカムパーティーを開催し、研究交流のみならず参加者相互の親睦を深めることができました。

さらに、分科会期間中には研究室見学に加え、北海道ガス株式会社及び株式会社北海道熱供給公社の発電・熱供給施設の見学ツアーを実施しました。

北海道大学並びに北海道における熱・エネルギー研究の成果と実社会での取り組みを、研究から現場まで幅広く理解いただく機会となりました。

(工学研究院)



分科会参加者の集合写真

## 分科会8

## 2025 International Workshop on the New Frontiers in Convergence Science and Technology

2025先端複合科学技術に関する国際ワークショップ／情報科学研究院 教授 吉岡真治、准教授 菅原広剛

情報科学研究院とソウル大学校融合科学技術大学院（Graduate School of Convergence Science and Technology：GSCST）による当分科会は、11月6日（木）、情報科学研究院において、浅井哲也副研究院長とGSCSTのハワード・リー大学院長の両代表による挨拶に始まり、昼食会を挟んで午前午後で開催されました。両大学院各3名の教員による講演が行われ、学生9名（情報科学院5名、GSCST4名）がポスターによる研究紹介に臨みました。

講演テーマは、情報科学研究院から、柔軟に曲がる材料を用いたセンサの開発、原子間力顕微鏡を用いた細胞の機械的粘弾性観察、AIによる論文からの化学実験手順抽出法開発、GSCSTから、界面制御によるリチウム蓄電池の高性能化、放射線を用いた物体透視画像構成のアルゴリズム開発、多角的生体モニタリングデータを利用したAI

による薬効継続性評価法研究と、両大学院とも多岐にわたりましたが、それぞれ特徴ある内容に多くの質問が寄せられ、講演ごとに活発な議論がなされました。

分科会後には教員同士、大学院生同士の懇親会が開かれました。参加者からは思いのほか深い議論ができ満足との感想があり、当分科会は懇親会も含め盛会のうちに無事終了しました。

情報科学研究院における当分科会の実施主体は、今回からビッグデータとIoTに関する協同センター（吉岡センター長）が担当し、これまでの分科会世話人や前年の講演者の参画も得て運営に当たりました。当分科会は以降も継続していくことが両大学院関係者間で確認されました。

(情報科学研究院)



分科会開会挨拶



分科会参加者の集合写真



分科会ポスター発表

分科会9

## Environmental Chemicals and Human Health

環境化学物質と人びとの健康／環境健康科学研究教育センター 特任准教授 アイツバマイゆふ

環境健康科学研究教育センターは保健科学研究院と共同で、11月13日(木)・14日(金)の2日間、分科会「北海道大学・ソウル大学校・マヒドン大学 ジョイントクラス2025：環境化学物質と人びとの健康」を開催しました。

本クラスは北海道大学とソウル大学校のジョイントシンポジウムを基盤とし、平成28年に共同授業としてスタートし、今年で10周年を迎えました。平成30年からマヒドン大学が加わり、3大学による国際的な教育・研究ネットワークがさらに強化されています。COVID-19パンデミックという困難の中で、オンラインの活用などにより交流を継続してきたことも、本プログラムの大きな特徴です。今年には北海道大学から18名、ソウル大学校から10名、マヒドン大学から6名の合計34名の大学院生が参加しました。参加者の国籍は、日本、韓国、タイを中心に、ミャンマ

一、コロンビア、ザンビア、ウガンダ、ロシア、中国等からの学生も含まれ、国際色豊かな交流の場となりました。大気汚染、室内環境、プラスチック問題、環境と子どもの健康、バイオモニタリングなど環境科学分野の多くの領域に焦点を当て、各大学から8名の教員による専門的な講義が行われました。講義に加えて、大学院生同士のグループディスカッションやワークショップも行われ、異なる文化や研究背景を持つ学生が積極的に意見交換を行いました。

参加者からは、「異なる国や文化の研



分科会参加者の集合写真

究者と直接議論できる貴重な機会だった」「将来の共同研究の可能性を強く感じた」といった声が寄せられ、プログラムの意義が改めて確認されました。来年の「HU-SNU-MU ジョイントクラス2026」はタイ王国で開催予定です。

今後も当センターは、国際的な学術交流を通じて、持続可能な社会の実現に貢献する人材育成を推進してまいります。

(環境健康科学研究教育センター)



グループワークプレゼンテーションの様子

分科会10

## Social contribution through an interdisciplinary and pragmatic university model: Innovation, convergence, challenge, and proposals for a new university role

学際的・実用主義的な大学モデルを通じた社会貢献：革新・融合・挑戦、新たな大学の役割に関する提案  
／高等教育推進機構 教授 亀野 淳、講師 鄭 漢模、助教 田中孝平

高等教育推進機構高等教育研究部、総合教育部、新渡戸カレッジ教育推進部（代表：亀野 淳 高等教育研究部長・教授）、ソウル大学校SNU College（学部大学、代表：ソン・ジヨン 副学長・教授）は、11月6日（木）に分科会を開催しました（参加人数：本学11名、ソウル大7名）。

今回の分科会のテーマは、「学際的・実用主義的な大学モデルを通じた社会貢献：革新・融合・挑戦、新たな大学の役割に関する提案」です。

本テーマは、両大学が共通して「レイト・スペシャライゼーション」（学生が入学後に専門を選択できる制度）を積極的に導入している点に着目して設定されたものです。北大では、平成23年度から「総合入試」を導入し、

「レイト・スペシャライゼーション」の理念を実践しています。ソウル大学校においても、平成21年度からの自由専攻学部を設置したのち、令和7年には、レイト・スペシャライゼーションを前提とし、新しい学部として「SNU College」を設けるなど、両大学は特徴的な取り組みを実施しています。

当日は、こうした「レイト・スペシャライゼーション」に関する制度、



集合写真

学習支援、特色のある教育プログラムの3つの側面から、各大学から3件ずつ、計6件の発表が行われました。さらに、来年度のソウル大学校での分科会の開催、共同研究の推進、若手研究者の交流、共同教育プログラムの開発など、今後の協力に向けた具体的な意見交換がありました。

(高等教育推進機構)



開催の様子

## 職員交流

## 令和7年度北海道大学事務職員海外短期集中研修

令和7年度北海道大学事務職員海外短期集中研修が11月17日（月）～21日（金）に行われました。本研修は本学の戦略的国際連携先である韓国ソウル大学校（SNU）との第28回ジョイントシンポジウムの一環として、両大学の職員がそれぞれ相手大学を訪問し実際の現場を見学しながら、各部署の業務や優れた取り組み、課題等を共有し、意見交換を行うものです。今年度は、SNU企画調整室から広報チームのカン・ジス職員、コミュニケーションチームのクォン・ジェヒョン職員の2名、本学からは社会共創部広報課広報・渉外担当の多門理恵主任が参加しました。

11月17日（月）・18日（火）は本学参加者がSNU冠岳キャンパスを訪れ、中央図書館、朝鮮王朝期の王立図書館に系譜を持つ奎章閣を見学した他、企画調整室を訪れました。企画調整室ではSNUでの報道対応の方法や公式コンテンツの運用等について意見交換を行い、大きな学びを得ることができま

した。また、広報・コミュニケーション関係を担当するキム・ユキョン副学長と懇談し、SNUと本学での広報・コミュニケーションにおける共通の課題やその対応策について知見を広げることができました。続く19日（水）には両大学の参加者が本学へ移動し、20日（木）・21日（金）は、インフォメーションセンター「エルムの森」、総合博物館、オープンイノベーションハブ「エンレイソウ」を見学した他、広報・社会連携本部広報・コミュニケーション部門、社会共創部広報課を訪問しました。

広報・社会連携本部広報・コミュニケーション部門では、南波直樹部門長からの本学における全学的な広報・コミュニケーション活動の企画立案・実施についての説明に加え、同部門の職員も交えながら、国外へ向けた情報発信等について意見交換を行いました。社会共創部広報課ではプレスリリースの配信手順や記者会見の実施方法等に

ついて情報共有しました。また、事務統括担当である行松泰弘理事と懇談し、和やかな雰囲気の中、各研修生が今回の研修で得られた学びについて報告しました。

SNU参加者からは、教員、外国人職員、日本人職員が協働して広報・コミュニケーション業務を行っている点が印象的であり、今後のソウル大学校での広報活動に関して貴重な示唆を受けたとの感想が寄せられました。本研修は、両大学の参加者が事前に相手先の要望を聞き取った上で研修計画を立て、基本的に英語を用いながら5日間行動を共にします。このため、語学力向上を図ることはもちろん、業務に関連する多くの学びや気づきを得られる貴重な機会となりました。今後も活発な交流事業の展開が期待されます。

（国際連携推進本部、国際部国際企画課）



ソウル大学校でのキム副学長との懇談



北海道大学での行松理事との懇談後の記念写真



両大学職員の記念写真

# 「国民との科学・技術対話」支援事業 アカデミックファンタジスタ 講師が講義、見学を実施

10月24日（金）に、北海道札幌南高等学校1年生を対象に、4名の研究者が講義を実施しました。また、11月5日（水）に札幌新川高等学校、11日（火）に札幌国際情報高等学校、25日

（火）には北海道札幌北高等学校の生徒を対象に出張講義を行いました。11月10日（月）は小樽潮陵高等学校の2年生が工学研究院を訪れて、座学と研究室の見学を行いました。

講義を受講した生徒、及び教員の皆様から、講義レポートが届きましたのでご紹介します。

日 時：2025年10月24日（金）

1回目：14:15～15:05 / 2回目：15:15～16:05

会 場：北海道札幌南高等学校

参加生徒：1年生

## 「極低温で柔らかくなるダイヤモンド」 理学研究院 教授 柳澤達也

講義の前半は、“測る技術”を実演し、日常生活の様々な場面で応用されている超音波技術を分かりやすく解説されました。後半は、錬金術師の歴史から、元素周期表、物性物理学へと講義を繋げ、半導体産業への超音波技術の応用の可能性について紹介されました。さらに、柳澤教授が最近発見され

た人工ダイヤモンドのソフト化についても説明されました。

生徒からは、「科学技術が身近なものに利用されていることを知り、実際に実験も見られて貴重な体験だった」「超音波などの物理を知ることができた」などの感想があり、物理への関心が高まった様子がうかがえました。



生徒たちへ実演して見せる柳澤教授

## 「疫学と医学で読み解くデータサイエンス」 環境健康科学研究教育センター 特任准教授 岩田啓芳

講義では、化学物質や室内環境などの環境因子が病気にどの程度影響しているのかを、疫学と医学の両面から解説されました。診療現場での経験を通じて、病気の診断や背景、治療・予防を科学的に捉える臨床疫学の考え方を紹介されました。

生徒からは、「疫学は計算ばかりで

はなく、一つの事実から考えられる原因を探っていく仕事で、その仮説を数字で証明していくのが面白いと思った」などの感想があり、生徒の中で医学に関する関心が高まったことに加え、学問分野としてのデータサイエンスへの関心も高まったようでした。



データサイエンスについて解説する岩田特任准教授

## 「細胞ってすごい！見てわかる生きた反応」 医学研究院 教授 大場雄介

「細胞がどのようにして環境の変化に気づき、それらにどう応答するのか？」という謎について、最先端の「バイオイメーキング技術」を通じて、その様子を実際に可視化する研究を紹介されました。

講義を受けた生徒からは、「自分の好きを極めている人たちは楽しそうだった。自分もやりたいことができ

るように頑張りたい」「全然知らないことばかりだと思っていたが、中学や高校での学習内容が出てきて、これまで学んできたことはつながっていると感じた」などの感想があり、生物と化学を横断する学問分野の講義を通じて、生徒の興味関心が高まったようでした。



研究について話す大場教授

「ロボットとコンピュータによる化学空間探索」 化学反応創成研究拠点 特任教授 原測 祐

量子化学計算を用いた化学反応の解析や、化学情報学と人工知能を用いた化学反応の予測など、有機合成実験の基礎から最先端までを分かりやすく講義いただきました。計算機を用いた化学反応の解析において化学・物理・数学の3科目が横断して関わっていると解説されました。

生徒からは、「研究を通して、物質をより細かく知ろうとしているのが伝わり、とても面白い講義だった」「大学の学びは高校までと違ってもっと広くて深いのだと思った」などの感想があり、理学全般及び大学における研究活動そのものについての関心が高まったようでした。



スライドを用いて解説する原測特任教授

日 時：2025年11月5日（水）

1回目：13:05～14:05 / 2回目：14:45～15:45

会 場：市立札幌新川高等学校

参加生徒：1・2年生

「あなたの行為に潜む『他者』の影響」 教育学研究院 教授 阿部匡樹

「私」と「他者」の関わりと、無意識に受けている影響について講義いただきました。実験を通して教えていただくことで、自分の行動がどれほど「他者」からの影響を受けたものであるか、知ることができました。

講義を受けた生徒は、「今日こうして講義を受けていなければ、自分の行

動が無自覚のうちにこんなにも影響を受けているとは思わなかった」「無自覚を解明することがとても面白いと思った。あと数時間は少なくとも話を伺ってみたかった」などの感想が聞かれました。また、「これからも、集団生活に身を置く立場として意識的に活かしていきたい」とも話していました。



実験結果を見せながら解説する阿部教授

日 時：2025年11月10日（月）13:30～15:30

参 加 校：北海道小樽潮陵高等学校

参加生徒：2年生

「量子ビームで古今東西の不可視世界を覗く」 工学研究院 准教授 佐藤博隆

佐藤准教授は、加速器を使って原子核の中にある中性子を取り出し、中性子ビームとして文化財や食品、リチウムイオンバッテリーなど様々なものに照射して、対象を切らずに内部を可視化する研究をしていることを紹介されました。その後、実際に中性子ビームを作っている加速器施設を見学しました。

生徒からは「進路で迷っていたのですが、見たことのない機械や世界を見ることができて、学びへの関心がより深まりました」「講義をしていただき、その後、見学する流れだったので、とても分かりやすく楽しかったです」との声が聞かれ、学びへの関心や進路に関する考え方が深まった様子でした。



見学前に座学を行う佐藤准教授

日 時：2025年11月11日（火）

1回目：14:00～14:45 / 2回目：14:55～15:40

参加校：札幌国際情報高等学校

参加生徒：2年生

「二酸化炭素を資源に変える化学」 工学研究院 准教授 多田昌平

化学工学の概観、応用化学コースの紹介の後、二酸化炭素を化学の力によって資源に変える研究について説明されました。二酸化炭素を燃料や化成品に変換する技術を創成していくことは、社会に貢献することだとお話しされ、その技術に大きな役割を果たしている触媒について、分かりやすく解説されました。

講義を終えて、「化学についての新しい視点を得られた」と話す生徒や、「例えを交えた説明によって具体的にイメージを持つことができた」と話す文系生徒の声も聞かれました。また、先生ご自身の経験に裏付けられた継続の大切さなどの熱い語りは、生徒の心にも響いていた様子でした。



生徒たちへ継続することの大切さを話す多田准教授

日 時：2025年11月25日（火）15:40～17:00

会 場：北海道札幌北高等学校

参加生徒：1・2年生

「漸化式を使って様々な現象を数式にしてみよう」 電子科学研究所附属社会創造数学研究センター 教授 長山雅晴

講義では「単位時間あたりの変化量は流入量と流出量の差である」という基本原理を基に、様々な現象を漸化式で表すことを学びました。人口の増減の予測や感染症流行モデルについて、どんな要因を考え、どう数学的に処理を進めるのか順を追って説明されました。

講義後、生徒から感染症流行モデル

をより現実に近づける方法についての質問があり、身の回りの現象を数理モデルにすることの奥深さを実感した様子でした。また、高校数学にどう取り組むべきか尋ねる様子から、大学での学びへの意欲の高まりを見て取ることができました。回答の一つ、「字をきれいに書く練習を」には笑いが起きました。



自身が行っている研究について話す長山教授

アカデミックファンタジスタとは？

北海道大学の研究者が知の最前線を出張講義や現場体験を通して高校生などに伝える事業、「アカデミックファンタジスタ (ACADEMIC FANTASISTA)」。内閣府が推進する「国民との科学・技術対話」の一環として、北海道新聞社の協力のもと2012年から継続的に実施しています。今年度は北海道の高校等を対象に31名の教員が講義を実施しています。

北大の研究を発信するウェブマガジン「リサーチタイムズ」や、Facebookでも講義レポート等を随時更新中です。こちらもぜひご覧ください。

・リサーチタイムズ  
<https://www.hokudai.ac.jp/researchtimes/academic-fantasista/>  
 ・Facebook @Hokkaido.univ.taiwa

(広報・社会連携本部)



リサーチタイムズ



Facebook

## 国際連携研究教育局（GI-CoRE）が令和7年度学内共有セミナーを開催

1月19日（月）、学術交流会館において、国際連携研究教育局（GI-CoRE）が「国際共同研究から大学院教育への発展：国際化の実装モデル 先行3拠点の知見共有」と題して令和7年度学内共有セミナーを開催しました。

GI-CoREは、世界トップレベルの研究ユニット誘致を通じて本学教員との共同研究を推進し、その成果を新たな国際大学院の設置などへ発展させることを目的として設置され、10年が経過しました。本セミナーは、この間に蓄積された研究教育の国際化や体制整備に関するノウハウ・知見を学内に共有

する目的で開催されたものです。

初めに寶金清博総長（GI-CoRE局長）による挨拶があり、次いで横田 篤理事・副学長（GI-CoRE副局長）がGI-CoREの概要説明を行いました。

その後、国際連携研究から国際大学院化までのモデルケースとして、GI-CoRE協力拠点から3拠点と関係学院による発表がありました。医学研究院医理工学グローバルセンターからは田中伸哉医学研究院長と橋本孝之医理工学院長、人獣共通感染症国際共同研究所国際協働ユニットからは高田礼人

内 覚国際感染症学院長、農学研究院食水土資源グローバルセンターからは曾根輝雄国際食資源学院長がそれぞれ登壇され、国際共同研究の成果を国際大学院の設置に繋げる過程で、関係部局が取り組んできた工夫や苦労について語られました。

その後の質疑応答においても活発な意見交換が行われ、参加者93名のもと、盛会のうちに終了しました。

なおGI-CoREでは、次年度も同様のセミナーを開催する予定です。

（国際連携研究教育局）



寶金総長による挨拶



登壇者による記念撮影



横田理事・副学長による発表



質疑応答の様子

## ■ 部局ニュース

# 「社会体験ワークショップ」オープンコースウェアで公開 ～北海道大学、北洋銀行他による社会体験のための実践的授業～

経済学部は、1月30日（金）、株式会社北洋銀行と共同で開講している全学教育科目「社会の認識『社会体験ワークショップ』」をオープンコースウェアで無償公開しました。

本ワークショップは、令和4年度から引き続き開講しているものであり、今回は今年4月～7月に実施した授業の一部をコンテンツ化したものです。

各講義では、北海道を代表するゲスト企業10社との対談形式で実社会の課題や展望についてディスカッションを行いました。

企業説明会とは異なり、ゲスト講師のリアルな体験談やキャリアについての授業は少なく、道外出身が多い北大生にとって、道内企業を理解する貴重な機会となりました。

オープンコースウェアでは、ゲスト企業10社のうち、7社の講演動画と8社の講義資料を公開しています。講演動画では現役社員であるゲスト講師のリアルな体験談を、講義資料ではゲスト企業の取組を閲覧できます。

なお、「社会体験ワークショップ」は、来年度も開講予定です。

北海道大学オープンコースウェアWEBサイト

「社会の認識『社会体験ワークショップ』」  
<https://ocw.hokudai.ac.jp/lecture/social-experience-workshop2025>



（経済学院・経済学研究院・経済学部）

### 令和7年度公開対象のゲスト企業（全8社）※50音順：

AWL株式会社、伊藤組土建株式会社、株式会社キットアライブ、株式会社テレビ北海道、株式会社北洋銀行（兼コーディネーター）、鶴雅リゾート株式会社、ベル食品株式会社、北海道エアポート株式会社

北海道大学 オープンコースウェア  
HOKKAIDO UNIVERSITY OPEN COURSE WARE

# 社会体験 ワークショップ

北海道大学、北洋銀行による社会体験のための実践的授業

北海道の様々な業種のゲスト企業等8社との対談形式で行われた授業の様子を、北海道大学オープンコースウェア WEBサイトで無償公開します。  
講演動画・資料では、ゲスト企業等の取組をはじめ、現役社員であるゲスト講師のリアルな体験談を閲覧することができます。

**授業科目** 全学教育科目・主題別科目  
「社会の認識『社会体験ワークショップ』」

**対象学生** 1年生以上の全学部学生  
(主に1年生を対象)

**責任教員** 北海道大学  
大学院経済学研究院  
教授 平本 健太

**講師** 北海道大学  
非常勤講師 宇野 健司

**コーディネーター** 株式会社北洋銀行  
公金・地域産業支援部

北海道大学オープンコースウェア WEBサイト  
「社会の認識『社会体験ワークショップ』」  
<https://ocw.hokudai.ac.jp/lecture/social-experience-workshop2025>

北海道大学オープンコースウェアについて  
北海道大学の講義や公開講座の映像教材・講義資料などの、  
講義関連情報を公開しております。  
自学自習はもちろん、教育の現場でもご活用ください。  
<https://ocw.hokudai.ac.jp/about>

開催日	講演テーマ	ゲスト企業等	動画	講義資料
2025年 4月22日	北海道から世界へ： 世界で輝くことを目指す！	AWL AWL株式会社	○	○
5月13日	視聴者が プロデューサーに！？	tvh テレビ北海道 株式会社テレビ北海道		○
5月20日	地域金融機関の使命と キャリア形成	北洋銀行 株式会社北洋銀行	○	○
5月27日	観光で世界と日本を繋ぐ ホテルから飛び出た ホテルマンのキャリア	鶴雅 鶴雅リゾート株式会社	○	○
6月10日	北海道から日本の クラウドビジネスを支える	Kitalive* 株式会社キットアライブ	○	○
6月17日	“北海道のソルフード メイカー”の挑戦と成長	ベル食品 ベル食品株式会社	○	○
6月24日	建設業×働きやすい 職場環境づくり ＝地域社会貢献	ITCUMI 伊藤組建設株式会社	○	○
7月1日	空を見る。大地のことを、 考えている。	Hokkaido Airports* 北海道エアポート株式会社	○	○

\*動画はゲスト講師の講演部分のみ。講義資料は公開用資料であり既読で使用したものと異なりますので、ご注意ください。

オープンコースウェアのポスター

## 第20回医学研究院連携研究センター研究成果発表会を開催

医学研究院連携研究センターは、12月18日（木）に、医学部学友会館フラテホールにて、第20回医学研究院連携研究センター研究成果発表会を開催しました。

本センターは、長期的展望に基づいて堅実な知を追求する基盤的研究と、目標と期間を設定して先端的・革新的な研究開発を目指す戦略的研究の融合を図ることを目的として、平成18年4月1日に設置された学際的研究拠点で

す。これまで、大型研究プロジェクトを中心として多彩な研究活動が展開され、医学・生命科学と理工学の融合領域において、世界をリードする数多くの研究成果が得られています。

今回の研究成果発表会では、対面での開催と併せてWeb配信も行われ、Web配信の視聴者と合わせて多数の教職員・学生等の参加があり、センターの各分野から最新の情報が提供され、活発な質疑応答が行われました。

また、特別講演として、武蔵野大学ウェルビーイング学部長の前野隆司教授が「ウェルビーイング教育・研究のこれまでとこれから」と題した講演を行いました。参加者にとって、今後の取り組みに向けた新たな可能性が示唆された研究成果発表会となりました。

（医学院・医学研究院・医学部）



（右上から時計回りに）平田健司准教授、山田勝久講師、大学院博士課程 藤井宝顕氏、宮腰 崇特任助教



特別講演を行う武蔵野大学ウェルビーイング学部長 前野教授

## 工学系部局で「こころの健康セミナー」を開催

工学院・工学研究院・工学部、情報科学院・情報科学研究院、量子集積エレクトロニクス研究センターでは、毎年「こころの健康セミナー」を開催しています。

本年度は、12月19日（金）に「工学系部局なんでも相談室」カウンセラーである石原一人氏（合同会社アド・レ

ジリエンス カウンセラー）を講師としてハイブリッド講演形式により開催しました。

本セミナーでは「“なんとなく不調”をハンドリング～セルフマネジメントの視点」と題し、人それぞれ気分の波を他人や環境に頼らないで自分で整える力について解説いただき、参加した

教職員はその認識及び理解を深めました。参加者からは有益であった旨の感想が多く寄せられ、有意義なセミナーとなりました。

（工学院・工学研究院・工学部、情報科学院・情報科学研究院、量子集積エレクトロニクス研究センター）



講演する石原氏



会場の様子

## GX未来社会デザイン実践プログラム（応用編）を 北方生物圏フィールド科学センター雨龍研究林で開催

12月16日（火）～18日（木）の3日間、幌加内町に所在する雨龍研究林にてGX未来社会デザイン実践プログラム合宿を開催しました。本プログラムは、地域の抱える少子高齢化や技術革新等による社会変化に対応するため、社会人の学び直しを継続的に支える仕組みづくりを目指す文部科学省の令和6年度補正予算事業「リカレント教育エコシステム構築支援事業」に採択された取り組みである「グリーンビジネスとGXで拓く、未来志向リカレント教育エコシステムの構築」の一環として実施されました。プログラムは、民間企業等を対象に「企業は100年後の森に何を残せるのか？森時間で考えるネイチャー・ポジティブ」と題してフィー

ルドワークとワークショップを行いました。

1日目は、小林 真准教授からグローバルな視点での北国の森の現状と研究からのアプローチや雨龍研究林の概要の説明を受けた後、スノーハイクを装着して積雪寒冷期の林相や樹木の特徴等について知識を深めました。2日目は吉田俊也教授による森林に関する統計等の基礎知識から林業のこれまでとこれからについての座学を受けた後、雪上車に乗って施業現場を視察しました。雪深い森の中では、坂井 励技術班長と宮崎 徹技術班長からのレクチャーを受け、実際に鋸を手を持って選木（将来に残す木を選ぶ作業）や間伐を体験しました。3日目は外部講師

を招いてデザイン思考について学び、2日間で身に付けた知識と体験をもとに、2080年の未来の森の暮らし、そしてその課題解決について企業の視点からどのような貢献ができるかを具体的に考えるワークショップを行いました。

受講者からは「今できそうなことに過度にとらわれず、恐れずに意味のある大きな目標を設定する必要があることに気づいた」「北海道大学の先生方のホスピタリティに感激した」などの感想が寄せられました。

HU VISION 2030に掲げられているExtensionにつなげるべく、研究林はこれからも挑戦し続けます。

（北方生物圏フィールド科学センター）



小林准教授による解説の様子



吉田教授による解説の様子



坂井技術班長による解説の様子



ワークショップの様子

## 北方生物圏フィールド科学センター研究林から銘木市へ出品

第491回北海道銘木市（旭川林産協同組合主催）が12月19日（金）に旭川市で開催され、北方生物圏フィールド科学センター天塩研究林、中川研究林、雨龍研究林から切り出した選りすぐりのナラやマカバ、タモなどを出品しました。ナラは家具や洋酒の樽、マカバは建具やフローリングの内装材、タモは椅子やテーブル、野球のバットなどに使われます。

北海道銘木市は昭和42年から開催されている国内最大級の丸太販売イベントであり、優良な丸太の集荷が難しくなる昨今、貴重な広葉樹丸太を取り扱う市場として全国に知られています。出品される丸太は木目や色合いに優れた逸品から、こぶなどが付いた個性をもつ珍しいものまで多種多様であり、会場に積み上げられる巨大な丸太の山は圧巻です。

旭川近郊の永山の会場には全国から目利きの競り人が多数来場し、プロならではの真剣な眼差しと熱気に包まれ

ました。研究林の丸太を品定めする競り人からは「（良質な木を見て）本当に人工林なの」と驚きの声が上がっていました。文化庁から文化財の補修も請け負っている本州からの買い付け人は「文化財の歴史的価値や製作当時の生活感を修繕によって再現するのは難しいが、北大の100年樹林は補修の材料としてうってつけだ」と研究林の巨木に見入っていました。

競りでは「ジャパニーズオーク」として海外でも評価の高いナラの引き合いが相変わらず強く、研究林から出品したナラも予想を上回る高値で次々に落札されました。売り上げは総額308万円に達し、その中で立木単価が最も高かったのは中川研究林から伐採したナラで、262,900円/㎡で競り落とされました（銘木市平均単価74,958円/㎡）。

今回の銘木市での研究林に対する高評価は、北大が長年にわたり蓄積してきた効率的な森林利用のスキルが身を結んだ成果といえます。広葉樹の丸太

の落札価格は針葉樹の10倍以上と言われ、その中でも自然林で育った真っ直ぐな木は希少であり、価格が高騰しています。研究林には銘木ならではの美しさや風合い、木目を持つ樹齢数百年を超える広葉樹が多数生育し、これらの森林は持続的に利用できる貴重な資源として大きな可能性を秘めています。

研究林に生育する樹林が高く評価されることは、現場で働く職員の大きな励みにもなります。また、将来の研究林を担う次世代の若者へ林業の魅力を発信する活動としても、研究林の優れた成果を銘木市でアピールすることは大変に意義があります。

今後も銘木市への挑戦を続け、いつの日か「北大研究林ブランド」を確立するとともに、世界に誇れる銘木を永続的に供給できる多様性豊かな研究林を引き続き育ててまいります。

（北方生物圏フィールド科学センター）



研究林から出品したヤチタモ

## 公開セミナー「マリンスポーツとアドベンチャーツーリズム」を開催

観光学高等研究センター（以下「CATS」という。）及び国際広報メディア・観光学院では、12月21日（日）、学术交流会館において公開セミナー「マリンスポーツとアドベンチャーツーリズム」を開催し、学内外から100名の参加がありました。

CATSは令和5年9月に株式会社ゴールドウインと包括連携協定を締結し、スポーツやアウトドア分野におけるツーリズム研究を共同して深化させることを目的に事業を展開しており、本セミナーはその一環として実施されたものです。

当日はCATSの小泉大輔准教授が司会進行を務め、山村高淑センター長の開催趣旨説明に続き、ヨットによる単独無寄港無補給世界一周の史上最年少記録（当時）を樹立した海洋冒険家の白石康次郎氏による特別講演が行われ

ました。講演「ヨットレースがもたらす地域への貢献」では、世界で最も過酷とされるヨットレースである「ヴァン・デ・グローブ」においてアジア人として初めて完走を果たすまでの道のりや、ヨットが文化として根付く開催地フランスでの市民の熱狂ぶりが紹介されました。

後半では、CATSの木村 宏客員教授がファシリテーターを務め、「アドベンチャーツーリズムの推進に向けて～マリンスポーツとまちづくり～」をテーマとした、株式会社ゴールドウイン取締役専務執行役員COOの森 光氏と白石氏による対談が行われました。スポーツとアウトドア、アドベンチャーの違いに着目することや、「歴史」や「癒やし」の観点からストーリーを紡いでいくことの重要性など、ツーリズム振興に向けた議論が深められました。

また、本セミナーは大学院科目「アドベンチャーツーリズム論演習」の最終講義としても位置づけられ、「私たちの考える民間主導によるアドベンチャーツーリズムのあり方」をテーマとした受講者による発表も行われました。

参加者からは、「改めて自分の住む北海道の魅力は何かを考えるきっかけとなった」「三部構成によりアドベンチャーツーリズムへの理解が深まった」などの感想が寄せられました。

最後に、国際広報メディア・観光学院専攻長の金 成政教授が閉会の挨拶を行い、本セミナーは盛会のうちに終了しました。

（観光学高等研究センター、国際広報メディア・観光学院）



白石氏による特別講演



対談の様様



学生による発表

## ■表敬訪問

### 海外

年月日	来 訪 者	来 訪 目 的
8.1.26	ソウル大学校部局長会議（SNU Deans Council）構成員一行（大韓民国）	今後の交流に関する懇談



ソウル大学校部局長会議（SNU Deans Council）構成員一行

（国際部国際連携課）

# 人事

令和8年2月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【教授】 大学院工学研究院教授	辻 佳 子	(採用) (東京大学を本籍機関としてクロスアポイントメント適用)

## 新任教授紹介

令和8年2月1日付



工学研究院教授に

辻 佳子 氏

応用化学部門化学工学分野  
化学システム工学研究室

### 生年月日

昭和40年9月20日

### 最終学歴

東京大学大学院工学系研究科修士課程修了 (平成2年3月)

博士 (工学) (東京大学) (平成18年4月)

### 専門分野

反応工学、社会実装学、環境安全学

## 編集メモ

- 2月4日（水）～11日（水・祝）に開催された「2026さっぽろ雪まつり（第76回）」大通会場7丁目・HBC広場に、古河講堂をモチーフにした大雪像が登場しました。雪まつり会場は期間中多くの来場者で賑わい、2月7日（土）、8日（日）、11日（水・祝）に大雪像前ステージで行われた学生団体によるスペシャルステージも多くの方に観覧いただき、好評でした。北大のブースでは、本学の紹介や雪像模型の展示、オリジナルグッズの販売等を行い、多くの方に来ていただきました。大雪像は会期終了翌日の12日（木）に解体されました。





## キャンパス懐古 11 スケート風景(1966年2月)

スケートは、札幌農学校の外国人教師 ウィリアム・ペン・ブルックスが紹介したと言われています。その後、新渡戸稲造が留学先から持ち帰ったスケート靴を農学校生が借りて滑りました。

札幌農学校以来、スケート風景はキャンパスの冬の風物詩でした。

かつては、現在の中央ローン、クラーク会館の東側、大野池に冬場のスケート場が作られました。1960年代には、教養部（現在の高等教育推進機構）の東側道向かいのスケート場で、北大生が滑っていました。

(大学文書館・北海道大学150年史編集室)